

# 乾いた神経、濡れた神経

## —— 大正期における二つの身体 ——

近 森 高 明

### 1 ひとつの「時代病」

日露戦後から大正期、昭和初期にかけての文学作品には、「神経衰弱」に悩む人物がしばしば登場する。比較的軽度の心身不調をあらわすこの「神経衰弱」という医学用語は、現在ではほとんど死語となっているが、当時にとっては一定の意味を喚起する十分な脈絡をそなえていたといえる。というのも、文学作品のなかだけでなく、現実社会においても「神経衰弱」に悩む患者が多数存在し、またそれにかんする言説が広範囲に流布していたからである<sup>(1)</sup>。じっさい、この時期の新聞・雑誌には「神経衰弱」の治療薬の広告が頻繁に掲載されており、一般向けの療法書も多数出版されている。さらに、現実の病気として広まるのと並行して、「神経衰弱」は言葉それじたいとしても幅広く用いられた。たとえば当時の社会評論や文明批評には、否定的な意味をこめた「神経衰弱的」という形容表現をしばしばみることができる。それゆえここで、「神経衰弱」は二つのしかたで流行していたといっただろう。つまり、一方では医学的視線の対象となる精神・身体の疾患として流行するのと同時に、他方では言葉として、さまざまな文脈で用いられる隠喩的表現として流行していたのである。

文学的テーマとして「神経衰弱」をとらえた場合、そこには、当時の日本の都市社会のなかで文学者たちが先鋭的に感じとっていた、時代特有の困難が表現されているものと推測することができる。日露戦後の日本社会は、明治期の急激な制度的・文化的変容を経験し

<sup>(1)</sup> 大正期を中心とする時期における「神経衰弱」の流行現象の詳細にかんしては、川村邦光（1990）および拙稿（1999）を参照。大正期の文学作品における「神経衰弱」については、川本三郎（1997）に概観されている。また、石原千秋（1999）では、夏目漱石の作品における「神経衰弱」の記号論的読解がなされている。欧米の研究としては、ヴィクトリア朝期イギリスにおける「神経衰弱」の流行現象を対象としながら、幅広い医学的言説・実践を検討するとともに、その文化的意味について論じたジャンネット・オッペンハイム（Oppenheim 1991）が代表的である。またトム・ルッツ（Lutz 1991）は世紀転換期アメリカにおける「アメリカ神経病」の流行について、政治家や文学者、企業家といった多様な人物をめぐる逸話的な歴史記述を通じて、「神経衰弱」をめぐる同時代の文化的意味の布置を再構成しようと試みている。

たのちに、文明国として西欧諸国にならぶという国家目標をひとまず達成した時点で、一時的な心理的空白状態にあったといわれる。文学者たちはそうした潜在的危機をはらんだ時代であって、各人がかかえていた固有の困難、固有であるがゆえに容易には表現しがたい困難を投影する好個の媒体を、この「時代病」にみいだしていたように思われる。

興味深いのは、当時の文学作品に描かれる「神経衰弱」の表象のしかたに一定の類型がみられることである。そうした類型はとりわけ、登場人物の自我のありよう、表出される感情の種類、身体感覚の布置、身体そのものの表象、さらには、自我と身体との関係といった点に顕著にあらわれている。これらの類型の存在は、文学者たちの描こうとする困難の表出方法がまったく各人に固有というわけではなく、そこには何らかの共通の構造的パターンがあることを示している。それでは、そうした困難は自我と身体の問題をめぐる、いかなる類型的パターンによって「神経衰弱」の表象のうちに描きだされているのだろうか。また、そうした類型的表象の存在は、同時代の社会的・文化的状況を理解するうえでどのような示唆を与えてくれるのだろうか。

本稿は、以上のような問題意識のもとに、佐藤春夫と谷崎潤一郎という二人の文学者の作品を素材としながら、自我と身体の問題が「神経衰弱」をめぐる文学的想像のうちでいかなるしかたで表象されていたのか、その二つの特徴的な類型を抽出しつつ考察をくわえることを目標とする。佐藤と谷崎を主眼的にとりあげる理由は、第一に、彼らの小説は一般に、「神経衰弱」を描いた大正期の文学作品のうちで代表的なものとしてされているからであり、第二に、この二人の「神経衰弱」の表象はいくつかの点で非常に対照的であり、同時代の言説にみられる他のさまざまな表象を通じて、典型的な特徴を示す対極的な二類型として提示されうると思われるからである。

また比較・分析の方法としては、文学批評における新歴史主義（ニュー・ヒストリシズム）の方法を参照しながら、（普通は特権的テキストとみなされる）文学作品と、（通常はその背景のコンテクストとみなされる）同時代の通俗療法書、社会批評、新聞雑誌の広告といった多様な言説を同水準に位置するものとしてあつかい、これらを横断的に比較・分析することを通じて、先に述べたような二つの類型を抽出するという方法をとることにしたい<sup>(2)</sup>。より具体的にいうなら、本稿の分析の対象となるのは、「神経衰弱」にまつわる

---

<sup>(2)</sup> 新歴史主義（ニュー・ヒストリシズム）は、1980年代アメリカで脱構築批評の流れに対抗して出現した批評の一派で、文学研究に歴史的な次元を再導入することを提唱した。多様な立場があり、理論的枠組みも確立されているわけではないが、H・アラム・ヴィーザーによれば、その基本的想定の特徴はつぎの5点にまとめられる（Veesser 1989: xi）。1）あらゆる表出行為は物質的实践のネットワークに埋め込まれている。2）あらゆる暴露・批評・対抗の行為は、それが非難しようとする道具を利用し、それが暴こうとする実践の餌食となる危険をおかす。3）文学的および非-文学的「テキスト」は分離することができ

定型的隠喩や特定の語彙の組み合わせ、流通する修辞法の集合体から構成される、重層的な意味の網目である。この意味の網目は、同時代の「神経衰弱」にかんする言説の意味作用を支えると同時に、それを一定の範囲に規制する背景として、独自の分析対象としての位置をもっている。このような新歴史主義的な方法を採用することによって、「神経衰弱」の二つの表象類型が、二人の文学者の個人的な想像という水準のみならず、大正期における日本社会全体の、いわば無意識的・集合的な想像という水準に位置づけられうることが示されるだろう。

以下ではまず、具体的な作品分析の準備段階として、「神経」という概念＝実体の隠喩的性格について考察する。それにより、「神経」という身体組織がなぜさまざまな文学的想像をひきつけるのかが説明される。つづけて、佐藤春夫の『田園の憂鬱』（1918＝大正7年）と谷崎潤一郎の『異端者の悲しみ』（1917＝大正6年）を分析の素材としてとりあげ、両者にみられる「神経衰弱」の症状を列挙・比較することにより、二つの症状類型のあいだに種別的な差異があることを指摘する。そのうえで、これら二つの類型の対比的な特徴を、まずはエミール・デュルケームの『自殺論』における個人的形態論との類比を通じて、ついで、「鋭敏な機械」「墓の器」という鍵語に集約される両者の身体表象の検討をふまえて、より詳細に浮きあがらせてゆく。最後には、大正期における「文明」観の転換という巨視的な観点から議論の全体をとらえ返すことで、「神経衰弱」に仮託された自我と身体の問題が、大正期の日本社会における文明論の問題といかに関連していたのかを明らかにする。

## 2 隠喩としての神経

ここでは最初に、「神経衰弱」の病理的機制にかんする当時の典型的な説明の例を二つあげてみたい。まず第一の例として、一般向けの療法書『脳力養成と神経衰弱自療法』（1915＝大正4年）のなかで医学士の伊藤尚賢は、「神経衰弱に罹る時は、総て神経が疲労して而して過敏になつて来るのである」と記載している（伊藤 1915：32）。一方、社会学

---

ず、互いに循環する。4）フィクションであれ文書館にあるものであれ（imaginative or archival）、どのような言説も不変の真理に接近させるものではなく、また変わらぬ人間の本質を表現するものではない。5）資本主義下の文化を記述するのに適した批評の方法と言語は、それじたい、それが描こうとするエコノミーに参加する。

新歴史主義を社会学的分析の方法として応用しようとする場合、これらすべての点が有効であるとは限らないが、少なくとも1）3）4）といった方法論的な前提は、ミシェル・フーコーによる言説分析の方法からおおきな影響を受けた、近年の社会学における歴史的研究の基本的視角と親和的であると思われる。

者の米田庄太郎による社会評論『現代文化人の心理』（1921＝大正10年）には、つぎのような記述がある。「然るに強烈なる刺激、新しき刺激を求めることは、つまり神経衰弱から生ずるので、吾人の神経が衰弱すると、穏かな刺激では到底神経は生き生きとして来なくなる。〔……〕それで衰弱せる神経を興奮させるには、強き刺激を要し、そうして夫れによりて神経が更に衰弱するから、更に又強烈なる刺激が要求されてくるのである」（米田 1921：299-300）。ここで、書き手の一方が医学の専門家であり、他方がそうではないという点については、さしあたり無視しておいてよい。というのも、日常的知識の水準にあっては、これら両方の説明は等しく妥当なものとして受け入れられていたと思われるからである。

さて、これらの説明は一見すると同じことを言い換えており、とくに問題はないようにみえる。しかしながら、実のところ両者はまったく矛盾することを述べているのである。つまり、前者では、神経が「過敏」になり、わずかな刺激にも敏感に反応するようになると説明しているのにたいして、後者では逆に、多少の刺激では神経が興奮しない、すなわち神経が鈍磨化しているという説明になっているのである。このように、まったく正反対の記述が二つながら自明の説明として通用していたという事実は、それじたい、おおきな興味を引き起こす。こうした奇妙な事態はいかにして可能となっているのだろうか。

ここではそれを、「神経」という物質的实在の隠喩的性格という面から考えてみたい。「隠喩」という言葉からもすぐに連想されるように、ここで呼びだされるべき文脈は、スーザン・ソントグ以来の「隠喩としての病」の問題である。周知のとおり、ソントグは『隠喩としての病』のなかで、癌の患者は身体的疾患による苦痛だけではなく、「癌」という病気にまつわる抑圧的な文化的意味によって苦しめられているのだと論じた（ソントグ 1978；1989=1992）。こうした問題提起にたいして、柄谷行人は論文「病という意味」のなかで、そこで前提されている問題構成そのものを問い返している（柄谷 1988）。すなわち、ソントグは病気から抑圧的な意味をひきはがすべきだと論じているが、そもそも身体的疾患と文化的意味とは切り離すことができるのだろうか、さらにいうなら、意味の零度としての解剖学的身体そのものが、すでにして制度的に構築される「意味」なのではないか、というのである。

そうした観点からするなら、「神経」は物質的实在であるように見えながら、はじめから隠喩的な存在なのではないかという見方が可能になるだろう<sup>(3)</sup>。じっさいのところ、精

<sup>(3)</sup> 解剖学的身体そのものがある種の構築物であるという認識は、ミシェル・フーコーからジュディス・バトラーを経由した現在の構築主義の流れのなかでは、むしろ常識の部類にはいるだろう。しかし本稿では、構築主義の研究で普通問われるところの、構築にかかわる制度や権力関係、構築を隠蔽する知の

神の作用と身体感覚・動作を媒介する「神経」という存在は、西洋医学の伝統のなかで謎の組織でありつづけた。その作用や構造という点でも、「動物精気」や「神経流体」が通じるという説、中空の管あるいはスポンジ状であるという説など、さまざまな学説があったのである（Oppenheim 1991：79）。日本の文脈に目を向けるなら、「神経」という言葉じたい、『解体新書』の訳者である杉田玄白らが「神気の通ずる経脈」という意味をもたせて創作したものであるという（小川 1974：155-6）。こうした歴史的経緯を一瞥するだけでも、じつに「神経」が意味にみちた存在であることがわかるだろう。精神と身体、観念と実在、意識と物質という、デカルト的・二元論の媒介役をになわされる「神経」という概念＝実体は、そもそもその存在の二重性において、さまざまな想像力を引きつける意味の磁場として成立しているのである。

精神と身体という二重性を体現する「神経」は、それゆえ、原因のはっきりしない心身不調を説明するのに都合な概念＝実体となる<sup>(4)</sup>。「神経衰弱」という疾患名称はもともとアメリカの神経学者ジョージ・ベアードが提唱し、1881年に刊行された『アメリカ神経病（American Nervousness）』が広範に読まれたことから一般に流通するようになったのだが、ベアードはそこで「神経衰弱」の原因を、近代文明に由来するさまざまなストレスによる「神経力の欠如」と説明している（Beard 1972）。医学的には数多くの疑問が提出されたにもかかわらず、その簡潔で直感にうったえる説明——それこそ隠喩そのものといつてよい説明——は一般の人びとに広く受け入れられ、「神経衰弱」はたちまち世紀転換期の欧米の流行病となった（Oppenheim 1991; Lutz 1991）。日露戦後の日本社会に広まった「神経衰弱」の流行は、いわばその流行の余波にあたるのである。

さて、このように「神経」そのものの隠喩的性格を確認してくるなら、先にみたような奇妙な事態、すなわち互いに矛盾する「神経衰弱」の説明が、両方とも疑問なく流通しているという事態も、とりわけ不思議ではないように思われてくるだろう。そしてまた、この「神経」の隠喩的性格は、「神経衰弱」が同時代の文学作品に好んでとりあげられる特権的なモチーフとなった理由をもあるといど説明してくれる。というのも、当時の日本社会にあって文学者たちが感じとりつつあった名指しがたい問題、それじたいとしては言葉

---

装置といった問題には深入りすることなく、むしろ「神経」という概念＝実体のひきつける多様な想像、とりわけ文学的な想像を中心的な対象とし、そこから解説しうる自我と身体をめぐる時代特有の問題について考察しようとする点で、いわゆる構築主義の研究とは方向性を異にしている。

<sup>(4)</sup> オッペンハイムによれば、1837年にイギリスのある医師は「ほかのしかたでは説明できない現象は通常、神経病に帰されている。しかし、神経病そのものは何に帰されるのか？ 世界はアトラスに支えられているのかもしれないが、アトラスはどこに立っているのか？」と尋ねたという（Oppenheim 1991：79）。

にできない微妙な問題を、登場人物の自我と身体の問題として描きだそうとする文学的想像力にとって、この「神経」という概念=実体は、じつにうってつけの媒体であったと思われるからである。

それでは、そうした文学的想像力は具体的にいかなるしかたで作用し、「神経衰弱」の表象をつくりあげていったのだろうか。以下では、佐藤春夫と谷崎潤一郎、この二人の作品にみられる「神経衰弱」の症例を眺めるとともに、それらの描写がいかに同時代の他の領域の言説と共通した症状類型にもとづいているかを確認していくことにしよう。

### 3 二つの症例

佐藤春夫の『田園の憂鬱』の冒頭は、主人公とその妻とが武蔵野の田園にやってくる場面からはじまる。都会の生活の息苦しさに疲れ切った主人公は、自然のなかに溶けこみたいという希望をもって、この田園に隠遁生活を送りにきたのである。はじめのうちは茅葺き屋根の家に満足し、久しぶりに心くつろいだ日々を送っていた主人公だが、やがて憂鬱にとりつかれるようになり、さまざまな精神や感覚の変調を経験するようになる――。

それらの変調は作品のなかで「症状」と名指されているわけではないが、あえて医学的な視点から「神経衰弱」の症状として列挙するとすれば、およそつぎのようになるだろう。まず、精神的な症状としては、無気力、倦怠感、集中力の欠如、世界との解離感、情緒不安定、強迫観念、等々があげられる。それらはたとえば、つぎのような箇所であらわれている。「根気というものは、彼のからだには、今は寸毫も残されてはいなかった。そうしてどの本を読みかけても、一切の書物はどれもこれも、皆、一様に彼にはつまらなく感じられた」（佐藤 1951：37）。「彼は、犬に対する夜じゅうの心配を昼間に考え直すことがあったが、これはどうも一種の強迫観念だと気づかずにはいられなかった」（佐藤 1951：63）。

つぎに、身体的な症状としては、感覚（視覚・聴覚・嗅覚）の鋭敏化、不眠、幻聴、幻覚といったものがあげられる。おなじくいくつかの箇所を引用してみると、つぎのようになる。「彼は眠ることができなくなった」（佐藤 1951：87）。「時計の秒音の音。みぞのせせらぎ、汽車の進行するひびき。そんな順序で、ついに彼はそのほかのいろいろな物音を夜ごとに聞くようになった」（佐藤 1951：90）。「幻聴は、幻影をも連れて来た。〔……〕その一つはごく微細な、しかしごく明瞭な市街である。その一部分である。ミニアチュアの大きさと細かさとの、仰臥している彼の目の前へ、ちょうど鼻の上あたりへ、そのミニアチュアの街が築かれて、ありありと浮かび出るのであった」（佐藤 1951：92）。

『田園の憂鬱』におけるこれらの「神経衰弱」の描写は、同時代の他の領域の言説にも、それと響きあうような記述を確認することができる。たとえば、雑誌『実業之日本』1918（大正7）年1月1日号の表紙裏に掲載された「神経衰弱」の療法書『最新療法』の広告には、つぎのような記載がある。「激烈な現代の活社会に奮闘する諸君が脳の呼称の爲めに、—— 注意力、決断力、記憶力を失ひ執務勉学をするに根気無く、兎もすれば不眠症に苦しめられ、不平煩悶に日を送る —— 斯くては諸君の眼前近くに失敗、失意の惨憺たる運命が待つて居る」。また、つぎにあげる一般向けの療法書、河村仁太郎編『医学博士拾四名の意見 脳神経衰弱療法』（1915＝大正4年）からの引用をみると、ほとんど『田園の憂鬱』の主人公の精神的・身体的状態そのものを記述しているかのような印象がえられるだろう。「始め頭内朦朧として重く、続々頭痛がする、思考力が減退し万事熟慮と云ふことを欠く、読書しては其意味が分らず、且開巻するや忽ち嫌気がさす此等の症状が、どんどん進行すると、僅に脳を使用する事も嫌忌して、精神の変化著しく、些事に眼を角立て罵ることあり、短慮放縱其度を増し反之悲観小胆常に嘆声を漏らし、一室に幽居して碌々語らず、語らば常に身体の孱弱と精神の不安に外ならず、勇氣粗相して活気に乏しく、睡眠甚しく障碍され、就褥するも容易く眠られず、〔……〕」（河村編 1913：2-3）。

谷崎潤一郎の『異端者の悲しみ』の主人公もおなじく「神経衰弱」の症状に悩まされるのだが、主人公の性格および境遇、経験される症状の種類は、『田園の憂鬱』のそれとはかなり趣を異にしている。両親と病気の妹とともに貧しい裏長屋に住む主人公は、自分には芸術に天才的な素質があるのだと信じながらも、いっこうにその才能を磨こうとはしない。しばしば焦燥に駆られることがあっても、あいかわらず昼寝と饒舌、飲酒と漁色にふける自堕落な生活を送りつづけてしまう——。

そのなかで主人公が経験する諸症状をふたたび診断的に記述するならば、まず精神的症状としては、独り言の癖、癩癩、自己嫌悪、意志薄弱、虚栄、道徳心の欠如、死の強迫観念といった諸症状があげられる。それらはたとえば、つぎのような引用部分に示されている。「しかし、不幸にも彼の頭は長い間の放埒に狎れて、石ころのように鈍く懶くなって居た。本を読んでも原稿を書いても、彼の心は物の五分と一つ所に凝集されて居なかった」（谷崎 1969b：171）。「彼の心の働きが弛むと同時に、彼の神経衰弱はますます募るばかりであった。度忘れや独語や癩癩や意地っ張りや、そんな徴候が一日のうちに、交々起って彼を悩ました。鈴木が死んで以来、彼の脳髓に巣を喰った強迫観念は、日を経るに随ってだんだん猛烈に彼の神経を脅かした」（谷崎 1969b：171）。

つづけて身体的な症状をあげてみると、（性的）感覚の鈍磨化、胸の痛み、のぼせなどの諸症状を確認することができる。「往来を歩いて居ると不意に胸が痛くなって、夢中で

五六町駈け出したり、電車の中でカッと頭が上気して、あたふたと表へ飛び降りたり、夜中に蒲団を撥ね返して、梯子段を転げるように馳せ降りて、水道の水を頭にぶっかけたり、恐怖は殆んど章三郎を発狂させねば置かない程に興奮させた」（谷崎 1969 b : 172）。性的感覚の鈍磨化という点については、谷崎の他の小説のなかにより明示的に表現された箇所があるので、二つだけ引用しておこう。「其の頃私の神経は、刃の擦り切れたやすりのように、鋭敏な角々がすっかり鈍って、余程色彩の濃い、あくどい物に出逢わなければ、何の感興も湧かなかった」（谷崎 1969a : 86）。「そう云う状態を暫く続けて居るうちに、〔…〕いかなる辛辣な刺戟を与えられても、eroticの感覚に出会わなくなった時、今更の如く彼は疎然として非常な恐怖と寂寞とを覚え始めた。荒色に原づく精神の衰弱の結果、生きて行く根柢の命の力が希薄になって、やがて氷の解けるように心身が死滅して行く徴候ではあるまいか」（谷崎 1998 : 135-6）。

『異端者の悲しみ』の主人公が恐れるような性的放蕩の末の精神的・身体的な衰弱という考えは、「性的神経衰弱」という名称のもとに、この時期の一般的な新聞・雑誌の言説にも頻繁に認めることができる。たとえば『実業之日本』1918（大正7）年4月1日号には、「生殖器障碍神経衰弱症」と題された広告が掲載されており、「陰萎遺精夢精早漏發育不全短小快感減少生殖器不能記憶力思考力減衰神経過敏杞憂鬱症を最も快く治癒せしめて身体及び生殖器を頗る強健とならしむべきことを得べき真に偉効顯著なる靈薬」とある。また、伊藤尚賢の『脳力養成と神経衰弱自療法』にはつぎのように記されている。「〔生殖器神経衰弱の〕身体的症候としては、眼は疲れ易く、險険〔ママ〕がビクビクする、耳が鳴る、頭部が重い、眩暈がする、動悸がする、思ふ通りに言葉が出ない、記憶力が減ずる、考へることが出来なくなる、仕事がイヤになる、〔……〕等である」（伊藤 1915 : 123-4）。

以上において、佐藤春夫と谷崎潤一郎の文学作品にみられる「神経衰弱」の精神的・身体的症状を概観してきたわけだが、こうしてたんにその症状を列挙してみるだけでも、二つの症例のあいだには種別的な差異があることが直観的に感じとれるだろう。そしてまた、そうした二つの症状の記述が、他の領域における言説とも通底しあっている事実を確認することで、それらがたんに二人の個性的な作家の想像力が生みだした類型ではなく、より広範かつ深層の水準において人びとに共有されていた類型であることが示唆されたものと思われる。それでは、これら二つの症状類型のあいだにある種別的な差異とは、正確にはいったい何なのだろうか。以下では、いくつかの異なる観点から問題に接近することで、この差異をより明確に分節化していく作業を試みることにしたい。



#### 4 果てなき夢想、果てなき欲望

まずは自我と身体という二つの問題領域のうち、「神経衰弱」に悩む主人公の自我のありようという側面に焦点をあててみたい。興味深いのは、この二人の主人公がかかえる自我の問題、内面性にまつわる問題が、デュルケームが『自殺論』で展開した個人的形態論のうち、自己本位的自殺およびアノミー的自殺の形態学的特徴として論じられる問題と、ほとんど正確に重なりあうことである<sup>15)</sup>。デュルケームはこの個人的形態論のなかで、彼にしてはめずらしくも文学作品を事例にとりあげながら、各自殺類型に特徴的な心理や態度のありよう、情緒や感性のありかたを検討している。そのなかでもとりわけ自己本位的自殺とアノミー的自殺の二つの類型については、「無限という病」という名称のもとに、両者の相違を対比的かつ詳細に論じているのである。それゆえここでは、デュルケームの議論を参照しつつ、先にみてきた「神経衰弱」の二つの症状類型の差異が、自我のありようという点でどのように特徴づけられるのかを考察してみることにしよう。

デュルケームはまず、自己本位的自殺の特徴をつぎのように述べている。「その特徴は、行動への活力を弱める憂鬱なもの思わしさにある。事業、公職、有益な仕事、そして家庭の義務ですら、かれを、ただ無関心とよそよそしい感情にいざなうばかりである。かれにとっては、自分自身の外へ出ていくのがいとわしい。その代わり、思索と内面的生活のなかで、活動力において失われたものがすべて回復される。意識は、周囲のものをすべて遠ざけ、みずからについて反省をめぐらし、自己をその固有の唯一の対象とし、これを観察し、分析することをもっぱらのつとめとする」（デュルケーム 1897=1985：347-8）。この記述は、刺激の多い都会の生活に疲れ、静かな田園に隠遁する『田園の憂鬱』の主人公の心理的状态に過不足なくあてはまるといってもよいであろう。ラマルティエヌのラファエル同様、彼もまた周囲との交渉を絶って、内面的生活のうちでひたすら自己の観察に没頭するのである。

一方、アノミー的自殺の特徴を論じるなかで、デュルケームは未婚者の無規制的な状態について触れている。アノミーにとらえられるとき、人は外側からの規制がなければ自分

---

<sup>15)</sup> デュルケーム『自殺論』の個人的形態論を「神経衰弱」の解釈に応用するという着想は、作田啓一（2001）および富永茂樹（1996）の論考におおきく負っている。作田は自己本位的自殺とアノミー的自殺の心理的特性を、「至上の自我」と「無限への欲望」というロマン主義の二つの要請と読み替えながら、それぞれの方向性が、神経症をみちびく「禁止の法」および倒錯にいたる「享楽の法」に重なりあうことを論じている。一方、富永は18世紀末から19世紀前半にかけてヨーロッパに流行した「世紀病」としての憂鬱について、シャトブリアン、セナンクール、コンスタンによる三篇の小説を対象に分析するなかで、主人公たちの「無限への志向」が宇宙（自然）と自我という二つの方向をとることを指摘しつつ、憂鬱の「内因」を「無限と有限とのあいだのずれ」によるものと論じている。

では欲望を抑止しえないために、「みずから享樂した快樂のかなたに、さらに他の快樂を想いえがき、それを追い求める」ようになる。「すなわち、可能な快樂の範囲をほとんどのこりくまなくめぐりつくしてしまうと、人は、こんどは不可能なものを夢みるようになり、実在しないものにまで欲望をはせることになる」（デュルケーム 1897=1985：337）。『異端者の悲しみ』の主人公がつぎのように独白するとき、彼はまさに「不可能なものを夢みる」アノミー状態におかれた未婚者と呼ぶことができるだろう。「たとえ彼の境遇は哀れでも、彼の生れて来た世の中には、悪魔が教える歡樂の数々が、充ち溢れて居るように見えた。彼は是非とも生き長らえて、いつか一度は己れの肉体を、己れの官能を、その歡樂の毒酒の海に浸らせたかった。上戸が杯中の一滴をも吝しむように、美酒のしたたりを少しでも多く吝しみ味わいつつ生きたかった」（谷崎 1969：174）。

さて、みてきたような自己本位的自殺とアノミー的自殺の心理形態における特徴を、デュルケームは「無限という病」という名のもとに対比的に整理している。

いずれのタイプの自殺者も、いわゆる無限という病によって苛まれている。ただその病は、両者をつうじて同じような形態ではあらわれていない。前者では、この病に冒されているのは、思索的な知性であって、これが過度の肥大をしめしている。後者では、感性が過度に刺激されていて、それが無規制におちいつている。一方では、内にこもる反省のため、思惟はもはやその対象をもたなくなっている。他方では、情念が無際限のものとなって、もはやその目的をもたなくなっている。前者は、果てしもない夢想のなかに迷いこみ、後者は、果てしもない欲望のなかに迷いこむ。（デュルケーム 1897=1985：359-60）

この叙述は、ほぼそのままのかたちで、「神経衰弱」の二つの症状類型にみられる自我のありようを対比的に整理したものと読むことができるだろう。『田園の憂鬱』の主人公にあっては、思索的知性の肥大・対象なき反省・果てなき夢想という鍵語によって、『異端者の悲しみ』の場合には、感性の過度の刺激・目的なき情念・果てなき欲望という鍵語によって、それぞれの自我のありかたを明確に特徴づけることができる。

以上において、デュルケーム『自殺論』の個人的形態論を参照しつつ、「神経衰弱」の二つの症状類型にみられる自我のありようについて検討してきた。それにより、両者のあいだにある差異のうち、心理的な形態的特徴という側面について、その対照的な性質がいくらかあきらかになったものと思われる。しかしながら本稿の関心にとってより重要であり、なおかつ興味深いと思われるのは、そうした自我のありようにおける差異が、それぞれの症状類型のなかで特定の身体の表象のしかたと一種独特の結びつきをもっているとい

うことである。以下では、この点について考察を深めていくことにしよう。そのさいとくに、二つの身体表象類型の与える感覚的なイメージについて、可能なかぎり連想を重ねながら、テキストの背景にある意味の網目を浮きあがらせるような記述をこころがけることにしたい。これはたんなる文飾というわけではなく、同時代に流通する身体をめぐる定型的隠喩や修辞法の集合体をあぶりだすという意味で、重要な作業となるはずである。

## 5 「鋭敏な機械」と「葵の器」

『田園の憂鬱』にみられる身体感覚の描写においてまず注目できるのは、その関心がもっぱら頭部の感覚に集中しているという点である。とりわけ視覚や聴覚といった、解剖学的に高度な感覚器官による遠感覚の印象が強く描かれている。「憂鬱」とはいいながらも、その身体性はあくまでも軽く、いわば乾いたイメージを読者に与える。その意味で佐藤の描く身体は、体液というものをまったく想像させない、機械論的な身体であるといえよう。精巧な部品から構成され、微細な調節の狂いが精神の歪みと直結する、鋭敏な機械としての身体である。「ただ都会のただ中では息がつかまった。人間の重さで押しつぶされるのを感じた。そこに置かれるには彼はあまりに鋭敏な機械だ、そこが彼をいやが上にも鋭敏にする」(佐藤 1951: 8; 傍点は近森)。主人公の容貌は小説には描かれていないが、作者の当時の自画像(岩波文庫のカバーに付されている)をみると、頬はこけ、やせ細り、まるでそこには、感覚器官だけを残して肉をすべて削ぎ落とそうとする意志があるかのようにある。

一方、谷崎潤一郎の描きだす身体感覚は、頭部にかぎらず全身にわたっている。「かあッとなって」「胸がむかむかする」といった表現が多用されていることにもあらわれているように、その感覚は、感覚器官による外部世界の知覚というよりは、身体の内部にうごめく衝動をとらえる体内感覚に集中している。さらに注目されるのは、しばしば登場する、体内を充たし循環する血液ないし体液のイメージである。体液に膨らんだその身体性は、厚ぼったい、鈍重な肉感を読者に想像させる。これらの点から、谷崎の身体は、生氣論的もしくはエネルギー論的な生命体としての身体であると呼ぶことができるだろう。精力の濫用が心身の不調につながり、養分を取り込み休息することで回復する、体液に充たされた生命体としての身体である。この身体観はとりわけ、谷崎の小説『颯風』によくあらわれている。「三度の食事にも舌を喜ばせると云うよりは、貧弱な血液を豊かにする様な滋養物——〇〇の欠陥を補うて、一種の痛烈な鞭撻を弛んだ筋肉に加えるような刺戟物を、好き嫌いの区別なく貪り食った。そうして湯上りの空き腹へ送り込まれた其れ等の食物の、

血となり、肉となり、骨となりつつ五体の隅々へ活力を瀰漫させ、充実させて行くのが、目に見えるような気がした」（谷崎 1998：140-1；○○は初出雑誌による）。「彼は此の○○の傾向を喜び迎え、ますます其れを○○するような食物をいやが上にも貪ると共に、蓄積された○○をabuseしないように、〔……〕丁度一杯に満たされた羹の器を捧げるような気持で眠った」（谷崎 1998：141；傍点は近森）。

ここで、機械論的身体と生氣論的身体というこれら二つの身体観が、同時代における「神経衰弱」の療法書にも共有されていることにも目を向けておきたい。まず、機械論的な立場から原因論と療法を説いた代表的なものとして、眼科医の前田珍男子による「眼性神経衰弱」学説をあげることができる。前田の主張によれば、「神経衰弱」の原因は眼の屈折異常にあり、それを適切な眼鏡で矯正することにより症状が治癒するという。「調節器不断の使用は遂に疲労を将来し、又乱視等の併有により物像不明なときは之れを明視せんが為の努力と相待つて、遂に脳神経に影響し不知不識の間に神経衰弱症を勃発するのである」（前田 1931：72）。この説は、1915（大正4）年に『実業之日本』で連載された記事「最も新しき神経衰弱の療法」をきっかけとして有名になり、前田の著書『眼と神経衰弱』は昭和初期にまで版を重ねることになる<sup>(6)</sup>。調節器の微細な歪みが精神・身体の諸症状に結びつくというこの学説は、まさに機械論的な身体観に立脚しているといえるだろう。

一方、生氣論的な身体観にかかわるものとしては、「性的神経衰弱」という概念と「肥饒療法」があげられる。房事および手淫の過多による「性的神経衰弱」というフレーズは、先にも触れたように、当時の新聞・雑誌の広告などに頻繁にみることができる。一般向けの療法書のひとつ斎藤紀一『神経衰弱の治療及健脳法』（1915=大正4年）には、つぎのようにある。「殊に手淫の害は、身体及び精神の疲労甚だしく、更に一歩進めば不眠症、頭痛、注意力の散漫、記憶力の減退などの現象を惹き起し、やがては神経衰弱に陥るのである」（斎藤 1915：140）。こうした記述には、精力の濫用が心身の不調にむすびつくというエネルギー論的な前提がみとれるだろう。同じく生氣論的な身体観にもとづくものとして、適切な食物を選び、栄養を十分にとることによって「神経衰弱」を治療するという「肥饒療法」もしばしば唱えられている。たとえば、伊藤尚賢による療法書『神経衰弱患者飲食物の研究』（1920=大正9年）には、つぎのように書かれている。「神経衰弱患者にして栄養の佳良なるものもあるが、その多くは身体痩せ、栄養の不良なるものが多いから、

<sup>(6)</sup> 興味深いことに、『田園の憂鬱』にも、「ついでがねをかけずにいることが、彼を一層神経衰弱にさせていることにも気づかずに、〔……〕」（佐藤 1951：68）というように、前田の学説に呼応するような表現がみられる。

斯様のものには營養を盛んならしむるが為めに肥饒療法を行ふがよらしい」(伊藤 1920: 38)。

以上では、佐藤春夫と谷崎潤一郎の小説における身体感覚の描写を素材として、機械論的身体と生氣論的身体という二つの身体表象の類型をみちびきだすとともに、それら二つの類型が「神経衰弱」をめぐる同時代の一般的な医学的説明のうちにも共有されていることを確認してきた。一方には「鋭敏な機械」、すなわち繊細な感覚装置の集合体としての身体があり、他方には「墓の器」、つまり体液に膨らんだ鈍重な生命体としての身体がある。両者の与える感覚的イメージについてさらに連想を重ねるなら、前者は視聴覚に定位しつつ、環境と清潔な距離を保つのにたいし、後者は体内感覚に中心をおきながら、貪欲に快楽の対象に触手を伸ばす。前者が軽微な刺激にも反応して、敏速に感覚器官を調節するのにたいし、後者は多少の刺激には反応せず、その不透明な身体の厚みに刺激を吸収してしまう。前者の身体性が軽く、冷たく、乾燥しているのだとすれば、後者の身体性は重く、温かく、じつりと湿っている。

さてそれでは、こうした二つの身体表象の類型は、先にみてきた自我のありようの類型とどのように関連しているのだろうか。この点を考えるにあたり、ひとまず二つの身体観について、自我と身体、それに外界としての世界、これら三者がいかなる関係にあるのかという観点からとらえ返してみることにしよう。まず佐藤の場合には、思惟を本質とする自我が知覚器官を媒介として外界をのぞきみるという構図になっており、これはすなわち、意識的自我が世界と関係するうえで道具として用いるデカルト的な身体であるといえる。他方、谷崎の場合には、欲動に衝き動かされる生命体が外界と対峙し、自我はあぶなげに両者の仲介をするという構図になっており、これは、快感原則をひたすら追求するフロイト的身体と呼ぶことができる。あくまでも自我活動が世界の中心におかれる佐藤のモデルにたいし、盲目的に活動する生命体の表面にかろうじて意識的自我がつかまっているという印象の谷崎のモデルは、自我の位置づけにおいていかにも対照的である。

ここで、デュルケム『自殺論』の個人的形態論と類比させつつ自我のありようについて検討した先ほどの議論と考えあわせると、つぎのような二つの類型的系列が導きだされる(表を参照)。すなわち、一方では、佐藤春夫の「神経衰弱」的主体／思索の肥大・対象なき反省・果てなき夢想／機械論的身体／「鋭敏な機械」／デカルト的身体。他方では、谷崎潤一郎の「神経衰弱」的主体／感性の過度の刺激・目的なき情念・果てなき欲望／生氣論的身体／「墓の器」／フロイト的身体。それでは、この二つの対照的な系列の問題群は相互にいかに関連しあっているのだろうか。またなぜ、佐藤と谷崎の作品において、自我と身体の問題がこのような二つの類型的系列のうちに想像されたのだろうか。これらの

表：佐藤・谷崎の「神経衰弱」描写における自我・身体表象の対比

	佐藤 春夫	谷崎潤一郎
自我の特徴	思索の肥大 対象なき反省 果てなき夢想 (エゴイズム)	感性の過度の刺激 目的なき情念 果てなき欲望 (アノミー)
身体表象の特徴	視聴覚(遠感覚) 機械論的身体 「鋭敏な機械」	触覚・体内感覚(近感覚) 生氣論的身体 「羹の器」
自我と身体の関係	デカルト的	フロイト的
精神的症状	無気力、倦怠感、集中力の 欠如、世界との解離感、情 緒不安定、強迫観念	独り言の癖、痲癩、自己嫌 悪、意志薄弱、虚栄、道徳 心の欠如、死の強迫観念
身体的症状	感覚(視覚・聴覚・嗅覚) の鋭敏化、不眠、幻聴、幻覚	(性的) 感覚の鈍磨化、胸の 痛み、のぼせ
身体表象の感覚的イメージ	非液体性(乾燥) 軽い 敏感 冷たい	液体性 重い 鈍感 温かい

疑問にたいし、最後に巨視的な文明論的視角から問題をとらえなおすことで、ひとつの解釈を提示してみることにしたい。その解釈によれば、この二つの類型的系列は、大正期日本社会において顕在化しつつあった「文明」観の転換にかかわる問題と密接に関連しているのである。

## 6 文明の表徴、頽廢の徴候

ここではまず、「神経衰弱」という言葉が喚起する隱喩的意味が、大正期を過渡期として変容しつつあったという事実を目を向けてみたい。日露戦後の時期に「神経衰弱」が一般に広く知られるようになったとき、それはとりわけ学生や文学者など、いわゆる知識階級のあいだに流行する「文明病」とみなされる場合が多かった。「神経衰弱と文明とは直接の関係あるは誰も知る処なるが、殊に新興国たる我国に於て甚しく、殆んど学問ある青年の大多数は本病に侵されつゝありと聞くに至つては実に慄然として肌粟せざるを得ない」(伊藤 1915: 序 1)。1903 (明治36) 年に華嚴の滝に投身自殺を遂げた藤村操を筆頭として、「哲学的自殺」と呼ばれる知識青年らの自殺がこの時期に増加したが、そうした自殺もしばしば「神経衰弱」のゆえと解釈されていた。このように「神経衰弱」は、いわば文明の圧力をその最先端で受けとめる知識人たちが必然的におちいる疾患として理解されていたのである。ときには特権的な階級の「贅沢病」というニュアンスも含まれていた

にせよ、こうした理解のしかたには、多少の悲壮感と同時に、みずからの国が文明国として発展を遂げつつあるという一種の誇りも感じとることができるだろう。

ところが大正期から昭和初期にかけて、「神経衰弱」の隠喩的意味はしだいに否定的なニュアンスを強めてゆく。それはもはや文明化の指標となる特権階級の「文明病」ではなく、マス（集塊＝大衆）としての都市大衆に浸潤する「頹廢」の証拠となる。たとえば米田庄太郎は『現代文化人の心理』のなかで、いまやブルジョア階級や知識階級だけでなく、労働者階級までが「神経衰弱」にとらえられており、「此くの如く現代社会の何れの階級に属する人々も、一般に神経衰弱に陥つて居るのである」（米田 1921：297）と述べている。「頹廢」という語は、大正期から昭和初期にかけて社会評論や文明論に頻繁に用いられ、一種の流行語となった言葉であり、そうした評論のなかでは、精神病・アルコール中毒・享楽主義・性倒錯・耽美的傾向・群集心理といった（批評家にとって）非難すべき現象が、すべて「頹廢」の徴候として説明された<sup>(7)</sup>。「神経衰弱」は、そのような「頹廢」を鍵語とする定型的な説明様式のなかで、大衆の享楽主義および消費主義的傾向を、ネガティブな意味をこめつつ指示する隠喩として好んで用いられたのである。

以上のような「神経衰弱」の隠喩的意味の変遷は、「文明の表徴」から「頹廢の徴候」へ、というかたちで定式化することができるだろう。明治期には、急速な西欧文明の摂取の副産物としての病、一面では、洗練された繊細な精神の徴でもあった病が、大正期から昭和初期にかけては、物質文明の爛熟がもたらした病、毒々しい刺激によらなければもはや興奮しない、墮落し「頹廢」した精神と肉体の徴としての病へと、その隠喩的意味を正反対に変えてしまったのである。実のところ、この変遷は、そのまま「文明」という語の含意の変容過程と重なりあっている。つまり、明治期には完全に肯定的な意味合いをもち、明確な国家目標でもあった「文明」という語は、大正期を転換点として、都市問題や労働運動、後にエロ・グロ・ナンセンスと呼ばれる扇情的な都市風俗の出現などを迎えるなかで、急速に否定的な意味合いを強めてゆく。過渡期にあたる大正期において「文明」は、「頹廢」と紙一重の関係にある両義的な言葉となっていたのである。

ここにおいて、「文明の表徴」と「頹廢の徴候」という二つの「神経衰弱」の表象類型が、佐藤と谷崎の小説にあらわれる「神経衰弱」的主体の二類型と対応していることは、容易に推察されるであろう。まず、「文明の表徴」としての「神経衰弱」を病む典型的な

---

<sup>(7)</sup> 19世紀欧米において「頹廢」学説が同時代の文化に与えた影響については、いくらか研究の蓄積がある。ウィリアム・グリーンズレイド（Greenslade 1994）やケリー・ハーリー（Hurley 1996）など。日本では太田省一が、「頹廢」学説と読者公衆との関係（1997）、フィクションの記述装置との関係（1998）をめぐって一連の考察を展開している。

人物像は、孤独な知識人であり、それは、理想を追求する精神的存在、思索に没頭して世間から遊離した孤高の存在として想像される。こうした知識人像は、思索と反省、夢想を自我の特徴とする佐藤春夫の「神経衰弱」的主体と一致するだろう。一方、「頹廢の徴候」としての「神経衰弱」に侵される典型的な人物形象は、マス（集塊＝大衆）としての都市大衆である。こちらは、欲望にとられる生身の肉体的存在、自己を抑制できずに享楽におほれる自堕落な存在として表象される。このような大衆像は、感性と情念、欲望を自我の特質とする谷崎潤一郎の「神経衰弱」的主体とよく重なりあう。もちろん谷崎の小説の主人公は属性（大学生）からいえば知識人になるのだが、その自我と身体の表象類型に注目するなら、こうした大衆像と同型的であるといえるだろう。

「知識人」と「大衆」という対立的な関係が明確に分節化されたのは、一般的に大正期においてであるといつてよい。両者の関係は、「文明」の伝達者とその享受者、理念の探究者と物質的欲望の担い手、というようにさまざまな対立として表現できるであろうが、ここで重要と思われるのは、両者の身体表象もしくは身体にまつわる感覚的イメージにおける対立的な関係である。というのも、「知識人」ないし「大衆」といった観念が特定の言説に用いられる場合、それらは単独の透明な観念として登場しているわけではなく、そこには参照されるべき背景として、多様な身体表象ないし感覚的イメージの集合体からなる重層的な意味の網目が存在しているからである。そうした意味の網目は、さまざまな感覚的イメージの連想を導くことによって、抽象的な観念が登場する言説の意味作用を背後から支えている。たとえば、「知識人」や「大衆」という集合名詞によってある集団が名指されるときには、かならずその集団の内包的特質——高等教育を受けている人びと、初等教育のみで財産のない人びと、など——と同時に、その集団の相貌や体型、体質上の特徴（と想像されるもの）——眼光するどく体は痩せている、目がよどんで姿勢が悪い、など——も喚起されるのである。そうした身体にまつわる感覚的イメージや定型的表象は、「知識人」や「大衆」といった集団にかんする言説の理解可能性を支えると同時に、それを一定範囲に規制する作用ももつために、所与の言説において明示的に表現されている内容よりも、一面において同時代の無意識的・集合的な想像を正確に反映しているといえることができる。

そうした観点からするなら、佐藤と谷崎の「神経衰弱」的主体の身体表象が、それぞれ「知識人」と「大衆」の身体をめぐる感覚的イメージとよく重なりあうということは、たいへん示唆深い事実であると思われる。「知識人」の身体は佐藤の身体と同じく、軽快な機械であり、精密な感覚器官の集合体である。それにたいして、「大衆」の身体は谷崎の身体に等しく、体液に膨らんだ鈍重な生命体、もしくは不透明な厚みをかかえる集塊体で



ある。両者のうちでも、とりわけ「大衆」の身体表象については、「頹廢」を鍵語とする説明様式が流通したと考え合わせると、大正期における各種の言説の形成にたいして潜在的に果たした役割はおおきいと思われる。集塊体としての「大衆」の表象は、快楽に「浸り」、消費主義に「浸潤され」というような液体的なイメージを下敷きにすることで、より実感的に理解される。また、「体質の劣化」という「頹廢」理論にみられる観念は、機械論的な身体よりも、体液に充たされた生氣論的な身体のイメージをその理解の前提としている。

理想を追求する孤独な知識人と、享楽に浸るマスとしての大衆——明治期と大正・昭和初期における「文明」観を体現する、この二つの代表的な人物形象は、佐藤と谷崎の小説に描かれる、自我と身体をめぐる二つの類型的想像とほぼ正確に対応している。「神経衰弱」という主題のもとに、二人の文学者が個別に作品に描きだした文学的想像は、隠喩や語彙の組み合わせ、修辞法の集合体から構成される意味の網目という無意識的・集合的な位相を通じて、同時代の「文明」観の転換という巨視的な問題と深く響き合っていたのである。

最後に、本稿の射程の限界についても述べておきたい。本稿では文学批評の新歴史主義的手法を参照しながら、個別の文学作品と他の領域の言説を同水準のものとしてあつかいつつ、両者に共通する集合的・無意識的な想像の類型を抽出するという方法をとったのであるが、これはいわば、個別的なものを社会的なものに還元する一種の社会還元主義の方向にほかならない。最初にも述べたように、類型的なパターンが確認されるのは各人に固有な困難の表出方法という点においてであって、佐藤や谷崎が表現しようとした困難そのものの固有性は分析されないままに残されている。もちろん、「文学作品」という固定のないし超越的なカテゴリーを脱構築することこそが、まさに新歴史主義の出発点であったわけなのだが、それにしても、文学テキストをめぐる構造的なパターンや意味の網目をいくら詳細に分析したところで、けっして定着的には理解されることのない、ある種の余剰が「文学作品」には含まれているようにも思われる。この「余剰」もしくは文学作品独自の緊張をとらえるためには、しかし、社会学の方法論そのものを越えなければならないのかもしれない。そしておそらく、佐藤や谷崎にしても、みずからがかかえる困難について、同時代に共通する自我と身体をめぐる類型的形式のうちで表現を試みながらも、それらによっては語り尽くせない苛立ちを感じつつ、あるいはその苛立ちゆえにこそ、言葉を紡ぎつづけたのであろう。

## 参考・引用文献

- 石原千秋, 1999, 『漱石の記号学』 講談社.  
 太田省一, 1997, 「公衆と退廃——身体的感受性の系譜のために」『和洋女子大学紀要』第37集.  
 ———, 1998, 「退廃・獣人・嫌悪——H.G.ウェルズを通してみた言説の近代」『和洋女子大学紀要』第38集.  
 小川鼎三, 1974, 「「神経」という語の由来」『神経内科』1号.  
 柄谷行人, 1988, 『日本近代文学の起源』 講談社.  
 川村邦光, 1990, 『幻視する近代空間』 青弓社.  
 川本三郎, 1997 (1990), 『大正幻影』 筑摩書房.  
 作田啓一, 2001, 「ロマン主義・倒錯・アノミー」『Becoming』8号, BC出版.  
 ソンタグ, S., 1978; 1989=1992, 『隠喩としての病 エイズとその隠喩』 富山太佳夫訳, みすず書房.  
 近森高明, 1999, 「二つの「時代病」——神経衰弱とノイローゼの流行にみる人間観の変容」『京都社会学年報』第7号.  
 デュルケーム, E., 1897=1985, 『自殺論』 宮島喬訳, 中央公論社.  
 富永茂樹, 1996, 『都市の憂鬱』 新曜社.  
 Beard, G. M., 1972(1881), *American Nervousness: Its Causes and Consequences*, Arno Press.  
 Greenslade, W., 1994, *Degeneration, Culture, and the Novel, 1880-1940*, Cambridge University Press.  
 Hurley, K., 1996, *The Gothic Body: Sexuality, Materialism, and Degeneration at the fin de siècle*, Cambridge University Press.  
 Lutz, T., 1991, *American nervousness, 1903: an anecdotal history*, Cornell University Press.  
 Oppenheim, J., 1991, *Shattered Nerves: Doctors, Patients, and Depression in Victorian England*, Oxford University Press.  
 Veesper, H. A., 1989, Introduction in *The New Historicism*, Routledge.

## 資料

### 〔小説〕

- 佐藤春夫, 1951 (1918), 『田園の憂鬱』 岩波書店.  
 谷崎潤一郎, 1969a (1911), 「秘密」『刺青・秘密』 新潮社.  
 ———, 1969b (1917), 「異端者の悲しみ」『刺青・秘密』 新潮社.  
 ———, 1998 (1911), 「颯風」『潤一郎ラビリンス I 初期短編集』 中央公論社.

### 〔通俗療法書〕

- 伊藤尚賢, 1915, 『脳力養成と神経衰弱自療法』 文盛館.  
 ———, 1920, 『神経衰弱患者飲食物の研究』 新橋堂.  
 河村仁太郎編, 1913, 『医学博士拾四名の意見 脳神経衰弱療法』 医事新報社.  
 斎藤紀一, 1915, 『神経衰弱の治療及健脳法』 南江堂書店.

### 〔その他〕

- 前田珍男子, 1915, 「最も新しき神経衰弱の療法」『実業之日本』第18巻第2号.  
 米田庄太郎, 1920, 『現代人心理と現代文明』 弘文堂書房.  
 ———, 1921, 『現代文化人の心理』 改造社.  
 『最新療法』 広告, 1918, 『実業之日本』大正7年1月1日号.  
 「生殖器障碍神経衰弱症」 広告, 1918, 『実業之日本』大正7年4月1日号.

付記 本稿は平成14年度文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(ちかもり たかあき・日本学術振興会特別研究員)

## Dry Nerves, Wet Nerves : Nervous Breakdowns and the Two Bodily Images of the Taishô-era, Japan

Takaaki CHIKAMORI

Following the epidemic of nervous breakdowns in the west at the turn of the twentieth century, many people in Japan suffered from “shinkei-suijaku” (nervous breakdowns) around the Taishô-era (1912-1926). The malady soon became a favorite motif among novelists, who used the characters suffering from nervous breakdowns as mirrors to reflect their own difficulties. Curiously enough, there seem to be some fixed patterns in the way they described the characters in the novels: the patterns can be found in the self-images and the bodily images of the characters. The aim of this article is to investigate these patterns and to consider their potential meanings in regards to contemporary culture and society in Japan, focusing especially on two writers of the age: Sato Haruo and Tanizaki Jun'ichiro.

The literary descriptions of the two novelists provide two typically contrasting images of the self and the body. The features of the self-images can be illuminated through a comparison with E. Durkheim's analysis on individual forms of suicide in *Suicide*. According to Durkheim, the self of the person who commits egoistic suicide is characterized by deep meditation and self-examination, while the self of the person committing anomic suicide is marked with keen desire and sensuality. It can be pointed out here that these two self-images are much the same as the ones of the characters in the novels of Sato and Tanizaki. As for the bodily images, the body in Sato can be characterized as the mechanistic body, whereas the body in Tanizaki is described as the vitalistic body. The former image has the implication of lightness, coolness, and dryness, while the latter is associating with heaviness, warmth, and wetness.

The potential meanings of these two contrasting images of the self and the body can be interpreted through a reference to the contemporary social-cultural context in Japan, namely, the gradual change of the idea of “civilization”. Despite its generally positive implications in the Meiji-era (1868-1912), the idea of “civilization” began to have negative connotations such as “degeneration” and “decadence” in the Taishô-era. What emerged with these negative interpretations of “civilization” were the masses in the urban areas. The masses were then the agents that led the whole “civilization” in Japan, taking the place of the intellectuals who had been at the front of the process of modernization during the Meiji-era. Here it can be indicated that the two contrasting images of the self and the body, which are seen in the novels of the two writers, actually represented the self and the body of the intellectuals and the masses. The conclusion is that in the very expressions of their individual difficulties embodied in the literary images of people suffering from nervous breakdowns, the two writers were in fact writing within the fixed patterns that circulated throughout the contemporary discursive system, which also regulated the discourses on “civilization”.